

## 社会科学における善と正義

薄井 充裕

表題は、5月に公刊された大瀧雅之・宇野重視・加藤晋[編]『社会科学における善と正義 ロールズ「正義論」を超えて』（東京大学出版会）の書名である。編者の三先生はいずれも設研が日頃、大変お世話になっている方々である（宇野教授には昨年7月4日、米国合衆国独立記念日にいみじくも「アメリカ思想にみるアソシエーションとイノベーション」というタイトルで研究会にご登壇いただいた）。また、本書中 Book Guide を含む総勢 20名の著者の約半数が設研とかねてより関係があり、堀内昭義、間宮陽介、玉井義浩、田村正興各先生、渡部晶氏のほか、当行では高田裕久、神藤浩明および小生も Book Guide 執筆メンバーに加えていただいている。

本書がユニークなのは、政治学者と経済学者が一同に会して、両学問領域の立脚点たる〈前提〉を再考し、それによって学際的な研究の可能性を模索している点にあると思う。はじめに本書を貫く3つの軸が示される。

1. 正義は善に対して優先するというロールズの『正義論』（John Rawls, *A Theory of Justice*, 1971）での中核的主張は、彼の死後10年以上を経過し、両学問領域において今日どのように評価されるべきか
2. ロールズの功利主義批判をふまえて、経済学は「市場と倫理」をめぐっていかなる考察を行ってきたのか
3. ロールズの契約論的な正義から導かれる「民主主義と経済学の関わり」をどう捉えるか

いずれも大上段から振り下ろすような気迫に満ちた論点提示であり、序章・全8章は浩瀚な分析に満ちている。

ロールズが、現代の政治、経済、文化状況に与えた影響はその批判的論陣への波及を含めて大きい。ロールズは、功利主義的な〈前提〉を根本から問い、「原初状態」や「無知のヴェール」といった斬新な道具立てをもつて、正義や善について再措定（「正義の二原理」）をすることで、学問的体系の意味そのものに衝撃を与えた。その問題はいまでも厳然と存在し、例えば、国家が揺らぐなかでの国際関係論や地球環境問題などにおいて、むしろより深刻化しているかも知れない。そこから、対象とする学問において「個人的善と社会的善の相互作用」（大瀧論文 p.154）をどう考えるかが鋭く問われていると言えよう。

本論集は、小生の錆び付いた頭にあてがわれたヤスリのようなものだが、個人的には恩師・故藤原保信先生の『二十世紀の政治理論』（岩波書店 1991年）、『自由主義の再検討』（岩波新書 1993年）を本当に久しぶりに緬く良き契機になった。設研にいる冥利を感じる一方、知的探求心の大本にあるべき「規範」の重要性を改めて覚醒させてくれる点で、本論集を多くの方々にも是非手に取っていただきたいと思う。

2015年6月1日